

Nippon Bauhaus Society

Bauhaus

Bauhaus magazine

初めてのワイマール

早稲田大学名誉教授
木村 建一

それは1996年の大学が春休みのことだった。3月末、まだ寒い日の午後ベルリンから列車でワイマール駅に到着し、プラットフォームに降りると、そこにいきなり「こんにちは」と、慣れた日本語で近寄ってきた若いドイツ人が迎えにきてくれていて、びっくり。その人はワイマール大学建築学科の助教級のグライターさん（Prof. Jörg Gleiter, 現在はベルリン工科大学建築学科教授）で、すぐ大学へ連れて来てくださった。早速学科主任の先生にお目にかかり、歓迎の挨拶をしてくださった。残念ながらその先生の名前を忘れてしまった。

ワイマール大学を訪れた目的は、早稲田大学の建築学科との国際交流を正式に始める前の下打合せを行うことであった。国際交流と言っても、具体的には学生や教員の交換を行うにあたって、学生には学費や滞在費、教員には資格や給与などどのようにして定めるか、など具体的な問題について協議を始めることであって、その主任の先生と話し合いをした。ホテルに入り、窓から外を眺めると、赤いレンガ造の住宅が並んで見える。いよいよゲーテやシラーが活躍したワイマールにやってきたという感じ。しばらく休んでから、大学の校舎に入ってみると、吹き抜けの明るい広間があった。そこに重要人物の胸像が数体並べてある。



「ワイマールのシラーハウス」

グロピウスの胸像が人目を引く。グロピウスが1919年にワイマールの地に開かれた国立バウハウスの初代校長になった。芸術教育の専門家ヨハネス・イツテン、沢山の斬新的な絵を残したパウル・クレー、抽象画の大家ヴァシリー・カンディンスキーら錚々たる教授陣が集まった。しかしバウハウスはワイマール市との折り合いが悪く、1925年にデッサウに移転し、市立バウハウスになっている。ここで校長はハンネス・マイヤーに交代している。バウハウスは徐々に台頭してきたナチスににらまれ、

1932年にベルリンに移転し、私立バウハウスとなった。そして1933年ナチの政権ができると解散した。教授陣は米国はじめ世界に散り、そこでバウハウスの精神を伝えた。ワイマールのバウハウスの校舎は後に、ワイマール大学となって建築学科として存続し、さらにその後にバウハウス大学と改名し、今日に至っている。昭和初期の建築界では、アールデコの建築様式が世界的な広がりを見せ、ニューヨークのクライスラービルを始め、各地にアールデコ様式の建築が流行した。



「ゲーテの庭園住宅」 (ワイマール市)



「エアフルト市の教会」

ドイツでもワイマールの南のチューリンゲン地方にその面影が濃い地方があり、建築史が専門の上記のグライターさんが奥様と一緒に日帰りでそのあたりを案内してくださり、興味深く見て回った。特に重要とされるエアフルトErfurt市には一般建築にアールデコ様式の建築が多く残っており、中にはゼセッション様式の建築もあり、その方を指さしてくださった。



Weimar
Himmels
960329

「ゲーテの庭園住宅」(ワイマール市)



Rathaus
Weimar
Himmels
960330

「ワイマールの市庁舎」